

映画監督 高橋伴明

「この作品が遺作になるかもしれない」
2年前、新作映画を撮る前、こう
覚悟したという。

監督としての名を日本映画界に知
らしめた傑作「TATTOO」(刺青)あ
つては、凶悪な銀行強盗立
ての犯人を、「BOX」検田事
件、命とはでは罪を裁くことに葛
藤する裁判官を、また、「火火」で
は陶芸の世界で自立の道を切り開く
女性陶芸家と、作品ごとにさまざ
まなジャンルの人物像を描き綴り
てきた。

監督デビューから、半世紀近くの
邦画界の重鎮が築いた「遺作」とい
う言葉に周囲は驚かないはずがな
い。

だが、本人は「だってこんな感じ
だ」。(近年、新作にかかるとはいつ
も、そんな覚悟で臨んで来た)か
ら。そう語って静かに笑ってみせ
た。

奈良で育ち、地元の進学校、東大
寺学園高校から早稲田大学へ進学。
映画研究会に入るも、学生運動で太
学は封鎖、「講義もないので自然に
中退してしまっ」と振り返る。そ
の後、若松孝二監督率いる若松プロ
に入り、頭角を現す。

重厚な社会派作品を得意とし、実
在の事件や人物をテーマに、人間の
正義感や倫理観などを見る者に真正
面から突き付けてきた。

新作が問うのは死生観だ。主人公
は在籍の末期医療に携わる医師。

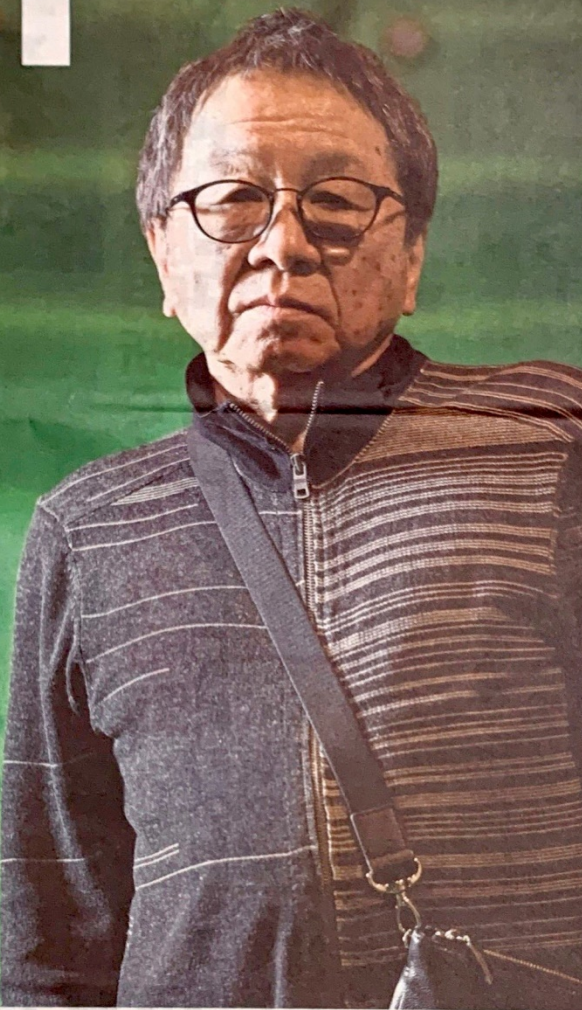
「65歳を超えた頃から、自分の死
に方について考え始め、以来、死
はずと映画で描きたいと構想して
いたテーマなんです」と打ち明け
る。

タイトルは「痛くない死に方」
(20日から公開)。在籍医療のスペ
シャリストで、本職「ニッポン臨
終図鑑」(金曜)を連載する長尾和
宏医師の原作を元に関本を練り上げ
た。

新作は

いつも

遺作



「痛くない死に方」20日から全国で順次公開



若い医師、河田(柄本佑)は在宅
医の先輩、長野(奥田瑛二)と出会
い、自宅で死を迎える患者と向き合
う覚悟を固める。末期がん患者の本
多(宇崎竜童)は底抜けに明るく、
河田は戸惑うが、
宇崎は「TATTOO」で、奥
田は「赤い玉」でそれぞれ主役に
抜擢し、タッグを組んだ盟友だ。
「集大成と呼べる配役に、遺作の覚
悟をうかがわせますか?」と聞い
てみると、苦笑しながらうなずいた。
「脚本はあて書き(最初から俳優
を決めて書く)です」とも。

妻・高橋恵子の「ゲキ」で吹っ切れた「自由な映画撮影」

出演依頼に、奥田は「脚本を読ま
ずに引き受けたが、後から柄本
は奥田の娘、安藤サクラの夫が主
役で驚いた」と語った。
現場で、親子共演の指揮を執っ
たが、「一切慣れ合いがなかった。
プロの演技のぶつかり合いを振れま
した」とにやがた。

今から18年前、田中裕子(陶芸家
を演じた「火火」)で取材したとき
「もう監督をやめよう」と決意してい
たんですよと聞かれ、驚いたこ
とがある。「では、なぜ再び振り始
めたのか」と問うと、「妻から私
は映画監督と結婚したんですよ」と
きを飛ばされましてね」。

妻は女優の高橋恵子。
すでに多岐に渡るテーマで計13本
を作品に仕上げ、2001年には連
合赤軍事件をテーマにした「光の
雨」も振り終えていた。これでも
うひと通り、監督としての仕事は果
たした、と思ったんです」。

妻から「私は映画監督と結婚した
んだ」の後、続けて、ことも言われ
た。いつ。
「ゼロからもう一度、映画を撮れ
ばいいじゃない?」
「妻の言葉に吹っ切れた」そうだ。
白紙に戻って振り始めればよい」
と。それ以後、余計な力が抜け、自
由を感じながら撮っています」。

数年前まで約10年、京都造形芸術
大学で映画を志す学生を指導した。
「今回の撮影では教えが助監督
に付いてくれた。現場で育てるた
めに撮り続けたい」とね。

では、今作は本気の遺作ではない
のですか?
「撮りたいテーマがまたまたあ
る。今も新作の脚本を書いています」
71歳。遺作という言葉で記者を翻
弄し、それを楽しんでいるかのよう
な余裕。柔和な笑顔を浮かべる
が、眼光の鋭さはいささかも鈍ら
ず、爛々と燃えている。

あす(17日)は、俳優の藤山房治
郎さんです